

日常生活における風景の認識に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○前田明子
熊本大学大学院 学生会員 増山晃太

熊本大学大学院 正会員 星野裕司
熊本大学大学院 学生会員 尾野 薫

1. はじめに

1-1. 背景

風景とは<人間の内的（主観的）システムから還元される何ものかを含んでいて一環境の眺めに対する情緒的な賛意を前提としている場合がある>¹⁾と述べられているように、風景は人の心の中に立ち現れるものである。風景について考える際、風景を認識した主体の内面に注目することが重要であると考ええる。また、人の体は絶えず動いており、生きている限り、完全に静止した状態というものは厳密には存在しない。意識はされなくても、常に移ろう環境の中に身を置いていると言える。さらに、誰もが体験したことがあるように、普段の何気ない環境の中でも、印象的な風景に突然出会うことがある。これは、意識されていなかったはずの、移り変わる環境の中の一部が、何らかのきっかけで認識され、風景として、主体の心の中に突然姿を現したためだと考える。

1-2. 目的

本研究は個々人の体験の記憶に着目し、主体が日常生活を送っている環境の中から発見した風景に関する記述を分析、風景として認識するきっかけとなった出来事を抽出、分類、その特徴を明らかにすることを目的とする。

2. データの収集

景観認識を扱う研究では、写真投影法がよく用いられており、永瀬²⁾は、移動を伴う景観体験の認識を扱った研究の中で、写真投影法（一人当たり約15枚撮影）を用いた後に、被験者にインタビューを行ったが、この手法では、認識内容を詳しく拾い出せず、検討が必要であると述べている。そこで、被験者に対し、一人当たり一つの風景について、時間をかけてその風景について述べさせた方が、より個人の心的認識の反映されたものが得られるのではないかと考えた。

これを踏まえ、景観の専門知識がまだついていな

い大学2年4月時の学生に、日常的に通っている道の中でのポイントとなる風景の絵を一つ描かせ、その風景についての説明を自由に記述させる（図-1）。対象となる風景の絵を描かせることは、その場所での出来事等を思い出しやすくし、その後行う記述へ認識内容がより多く記述されるようになる効果があると考え



図-1. 収集されたデータの例

3. データの選定

この方法で得た323個のデータの中に、確実に日常の環境の中から得たものであるとは言い難いものも存在する。そこで、記述内容から日常的に通っている場所での風景が描かれていることがわかるものだけを選出し、分析対象となるデータを絞り込んでいく。以下の3項目を選定基準として設定する。

(1) 日常利用

日常利用している環境であると述べているもの（通学やアルバイトのために通る道での風景、自宅から出てすぐに見る風景等）

(2) 日々の繰り返し・頻度

日々繰り返す中での頻度を述べているもの（例：いつも…、たまに…、毎日…等）

(3) 日々の繰り返し・時期指定

日々繰り返す中での特定の時期を述べているもの（例：春は…、夜には…、休日は…等）

以上の3項目をもとに、表を作成した（表-1）。この表を用い、各データの記述を読み、項目に当てはまる記述があれば抜き出し、記述がない場合はバツ印を付けて行く。3つの項目のうち一つでも記述があれば対象データとし、どの項目にも当てはまらないもの（全てバツ印のもの）は、日常生活を送っている環境での風景が描かれているデータとは言い切れ

ないため、除外する。この手法で選ばれたデータ、207 個を分析対象としていく。

表 - 1 データ選定表例

学生番号	選定基準		
	日常利用	日々の繰り返し 頻度	日々の繰り返し 時期指定
071t4801	バイクを眺めながら通学していると飽きません。	この場所は好きなので毎日回っています。	季節が変わると一季節を実感できたり、きれいに見える。/落葉した後に雨が降ると道が汚くなる。
071t4815	×	×	晴れた日には立田山と金峰山を同時に見ることができ
071t4832	×	×	×
072t4716	上絵は通学路であるが、	×	×
072t4814	×	×	×
072t4828	私は車で通学しています。その時に見える風景です。	×	雨や雪のときは運転するのも怖いし、風景も全然きれいではありません。

3. データ分析

3-1. 分析の視点

2 章でも述べたように、各データの記述は、対象となる風景に関する出来事や事柄を思い出して記したものであるため、「個人の記憶」の記述であるといえる。ここでの記憶とは、認知心理学でいうところの宣言的記憶に対応しており、宣言的記憶とは、＜意識に呼びだしやすい記憶、心象化できる記憶＞³⁾ のことである。さらにこの記憶は、エピソード記憶、意味記憶の二つを包括したものである(図-2)。

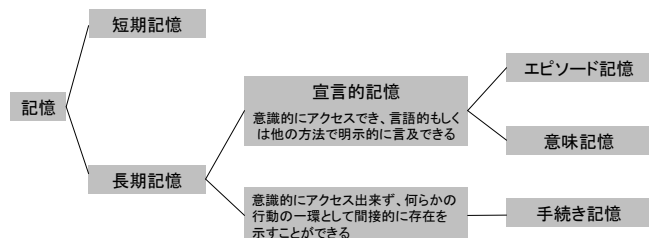


図-2. 記憶の分類(文献⁴⁾⁵⁾ をもとに作成)

本研究の視点として注目したいのがエピソード記憶である。これは、＜自分の身に起こる一回一回の出来事を記憶する働き＞⁶⁾であり、＜自分については変化する思考の連続、まわりについては変化する情景(シーン)の連続として＞⁷⁾記憶したもののことである。加えて、変化とは変化する前後にある状態の連続が存在して初めて成り立つものである。以上の知見を踏まえ、本研究で扱う記述には、自分について、または周囲についての連続、およびその中での変化に関する記述が含まれていると考えられる。

3-2. 記述の抽出方法

対象となるデータの記述から、主体については、心の変化がわかる記述、さらにその変化をもたらしたきっかけを抽出する。周囲の様子については、主

体の周囲の変化、あるいは周囲の様子連続がわかる記述を抽出していく。抽出された出来事は、次に示す枠組みを用いて分析していく。

3-3. 分析の枠組み

分析の視点を用いて、枠組みを作成する(図-3)。この枠組みをもとに、抽出された記述内容の分類・整理を行っていく。

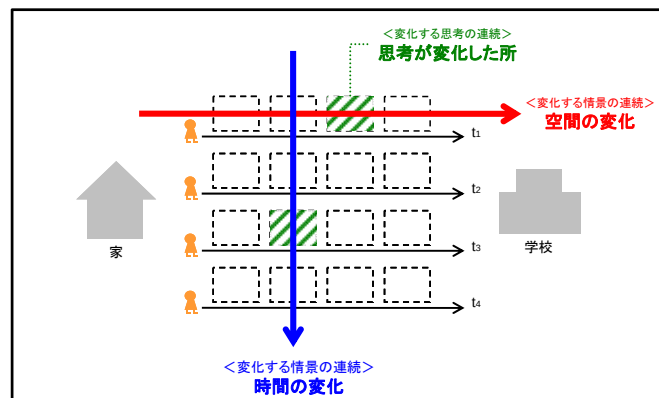


図-3. 分析の枠組み

3-4. 風景の捉え方のパターン

まず、日常空間での移り変わりの中から発見される風景の捉え方は3つに分けられた。

- (1) 主に空間の変化から捉えているもの
- (2) 主に時間の変化から捉えているもの
- (3) 時間と空間両者の変化から捉えているもの

風景と捉えるきっかけとなる出来事については、(1)は、特定の場所で、いつも同じ出来事を体験することがきっかけとなっている。(2)は、特定の場所で、時間によって異なる体験をしたことがきっかけとなっている。(3)は、(1)と(2)両方のきっかけが含まれていることがわかった。詳細は発表時に提示する。

4. おわりに

本稿では、データ分析までを提示した。今後は、風景認識のきっかけとなる出来事を詳細に分類、整理していく。

〈参考文献〉1)篠原修編：景観用語辞典、彰国社、p12-13、2)永瀬節治：街路歩行者の景観体験における視線方向と景観認識〈かいまみ景観〉概念の適用性に関する研究、日本建築学会計画系論文集、2007、3)山鳥重：「わかる」とはどういうことかー認識の脳科学、ちくま新書、p63、4)M.W.アイゼンク編：認知心理学辞典、新曜社、p80-83、5)前掲3)、p63-65、6)前掲3)、p66、7)前掲3)、p68-69